The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	問題は「環境」であるのか？ ： 「それだけではない」ポリティカル・オントロジーのアプローチ
Author(s)	神崎, 隼人
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 129-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

問題は「環境」であるのか？
――「それだけではない」ポリティカル・オントロジーのアプローチ

神崎 隼人

要旨

近年、いわゆる「存在論的転回」を巡って、日本語でも議論や情報共有が広がってきた。そうした「転回」の新たなアプローチとして、「ポリティカル・オントロジー（以下、PO)」が提案されている。本稿では、これらの論者の著作を検討し、POの分析方法を整理することを目的とする。

これまで、天然資源開発や環境保全と先住民との間のコンフリクトの分析では、普遍の「環境」が大前提とされてきた。それに対しPOは、先住民にとって「環境」とは全く異なった実在が大前提にあることに注目する。

この前提において、ＰＯは、コンフリクトに至るまでにどのような人間と非人間の関係性が作り上げられたか（歴史的コンテクスト）、その中で先住民は非人間についてどのような概念や実践を通じて関わっているのか（在来の概念）、そしてどのように西洋の存在論が、先住民の世界を「信仰」や「文化」に還元し、政治の領域から排除してきたのか（存在論の力関係）を、明らかにする。さらにＰＯは、人類学者と人びとの間の「会話」というミクロな場を考察する。こうした場には、同じ語や概念を使って対話する両者が、異なる世界を跨いでいるために経験する根本的な「誤解」があり、異なる存在論の間の緊張を伴う交流が浮かび上がるのである。

こうした分析からPOは、“われわれ”が「自然」と扱ってきたものの多数性や可能性、そして「多元世界」の政治に対する想像力を、喚起することを試みる。

キーワード

ポリティカル・オントロジー、存在論的転回、先住民、環境、政治

1．はじめに

近年、いわゆる「存在論的転回」について、日本語での議論や情報共有が広がっている［cf. 春日 2011；岸上編　2018；桑山＆綾部編　2018］。また、それを牽引する論者らの著作も邦訳されている。そうした「転回」から、新たなアプローチとして提案されているのが「ポリティカル・オントロジー（political ontology、以下POと表記する）」である［Blaser 2009b:890］。

POの提唱者は、主にラテンアメリカをフィールドとしてきた人類学者、M・ブレーザー、M・デ・ラ・カデナ、そしてA・エスコバルである。その中でもデ・ラ・カデナの論考はすでに邦訳され［デ・ラ・カデナ　2017］、幅広い読者に知られている。そこで本稿の目的は、ブレーザーとデ・ラ・カデナの著作を検討し、POの分析方法の見取り図を提示することで、日本での議論の発展に貢献することである。

「存在論的転回」の論者たちは多様な「文化」と普遍の「自然」という従来の人類学の大前提を批判する［Viveiros de Castro 1998］が、各々の議論は多様である。その中でもB・ラトゥールの「アクターネットワーク理論（Actor-Network-Theory: ANT）」とE・ヴィヴェイロス・デ・カストロの「多自然主義（multinaturalism）」の人類学が、ＰＯに影響を与えている。

ラトゥールの科学の民族誌は、「自然」を、その根拠とされた科学的事実が「作られている」現場から捉え直そうとした［ラトゥール　1999］。彼は、人間と非人間を共にアクターと扱い、それらの相互作用であるアクターネットワークとして科学的事実が存在していると、主張する。

例えば、彼が同行した土壌学者と植物学者の野外調査では、熱帯雨林がサバンナに拡張しているのか、その逆であるのかが問題となっていた。研究結果はサバンナに拡張する熱帯雨林として科学論文になる。しかしその「自然」の事実は、多様なアクター（科学者、調査地、地図、木、タグ、土壌、箱、計測器…）が相互作用しあう（タグ貼りによる関連付け、サンプル同士の対応…）繋がりの中で初めて存在する［ラトゥール　2007］。

このようにANTのアプローチは、むしろ多様で断片的で動的なものとして「自然」を捉え直し、人類学者は従来のように「自然」を当然視できなくなった［森田　2011: 35］。

ヴィヴェイロス・デ・カストロは、アマゾニア先住民の「世界」に関する根本的な諸概念（「人間性」と「動物性」、「精神」と「身体」、「文化」と「自然」など）が、西洋とは異なっていると指摘する［Viveiros de Castro 1998; ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015］。さらに、もし人類学者が、それらの概念を文化的解釈に還元すれば、人びとの全く違った「現実」の可能性を、最初から無視してしまうと、彼は主張する［森田　2011: 36］。

例えば、彼が繰り返し言及する神話を見てみよう。人間の主人公は、森の奥の村で村人にマニオク酒を飲みに来るよう勧められる。しかし、主人公がその席に着くと、彼に注がれたのは人間の血だったので驚いてしまった、というものである［ヴィヴェイロス・デ・カストロ　2018］。人間にとっての血を、ジャガーはマニオク酒と見なすのである［Viveiros de Castro 1998: 471］。

アマゾニア先住民の存在論では、人やジャガーなど宇宙の諸存在は皆自分たちを「人間」、そうでないものを「動物」「聖霊」と見なす［ibid.］。人間と動物の間の共通点は人間性（文化）であり、動物性（自然）を共通点とする西洋近代の存在論とは異なっている［ヴィヴェイロス・デ・カストロ　2015: 44］。

一方、諸存在は「人間」として「視点（perspective）」をそれぞれ違う身体の中に持っている。その差異が、人間とジャガーの視野を変化させ、客体（自然）の方が多様になる。だから、アマゾニア先住民の前提では、「自然」は「血／マニオク酒」という多様な実在である（実在そのものに対する多様な解釈があるわけではない）［ibid.: 76-77］。

ヴィヴェイロス・デ・カストロは、このようなアマゾニア先住民の存在論を従来の人類学者の多文化主義の大前提では全く理解できない「多自然主義」と概念化することで、人びとが生きているのはそもそも違った「世界」であると、主張するのである。

この2つの議論を受けたＰＯは、存在論を、所与で普遍の基盤とはせず、現場の人びとが諸概念について語り、

また非人間と相互作用しあう実践から捉え［Blaser 2009b: 877］、西洋の存在論と先住民の存在論を対称的に扱う。次章以降検討するように、POは、これまでは「環境」（普遍の「自然」）について先住民が多様な表象をしているために起こるコンフリクトとして捉えられてきたフィールドを、捉え直そうとする。すなわちPOは、コンフリクトの現場で、一方では「環境」が実在する西洋近代の世界があり、他方で単なるモノではなく意志や働きかけをする「人格」としてそれが実在する先住民の世界があると、捉えるのである［Blaser & de la Cadena 2018: 5］。

例えば、人びとが精霊を引き合いに出して森林伐採に反対しているとき、この事態は「環境」に対する価値観の問題ではなく「世界」そのものの差異をめぐるコンフリクトかもしれない。われわれがそのように扱う「森」は、人びとの実践では違った存在者で「も」あるような、多様な実在かもしれないのである［ibid.: 6］。

このように、POは存在論的に政治の場を捉えようとする。しかし人類学者は、自身もまた特定の「世界」の中に視点を持っているから、異なる存在論の間のコンフリクトを俯瞰的には捉えられない。POは、あくまで潜在的である“他者”の「世界」に対する想像力を開き、異なる「世界」の間の政治の可能性を探ろうという枠組みである（その意味で、ブレーザーとデ・ラ・カデナはPOをひとつの「仮想（imaginary）」と呼ぶ［ibid.: 5］）。そしてＰＯは、諸実践に具体化された存在論的な政治の場における力関係を明らかにする［Blaser 2009a: 18］。

2．POのコンテクスト

本章では、POのコンテクストを整理する。POは、ラテンアメリカの先住民をめぐる政治経済と「存在論的転回」の交差点に位置している。一方では、技術と資本が投下される天然資源開発に対して、別々のタイプの集団（環境主義者、フェミニズム、学生、左派、解放の神学…）との同盟も結びながら、先住民が資源と領土を巡って抵抗する場がある［Blaser & de la Cadena 2018:1-2, 3-4; Escobar 2018:65-66］。他方で、ＰＯの論者たちは、先住民が語り実践する人とモノの関係性を諸概念を用いながら分析し、「環境」や「政治」など、そもそも問いを立てる以前に使ってきた範疇に疑問符をつける——人びとにとって「政治」のテーマは「環境」であるのか…？

まずは、先住民の政治経済のコンテクストから検討したい。今日、ラテンアメリカの各地では大規模な天然資源開発と、それに対する先住民の抵抗が広がっている。例えばブラジル領アマゾニアでは1970年代以降、大土地所有者や大企業が広大な牧場や鉱山開発を進めた。90年代には商品作物栽培が拡大した。そして2005年にはシングー河に水力発電ダムが建設される。こうした開発に対して先住民は、リーダーを中心に組織化し抵抗運動を展開している［小池＆田村　2017］。

だが今日、先住民は、「環境」の保全や「資源」「土地」への権利の回復以上の目的を実現しようとしている。チアパスのサパティスタの宣言を見てみると、そこではこのように述べられている。「我々が望むのは、多くの世界がおさまる一つの世界である（a world where many worlds fit）」［Escobar 2018:16］。

POの論者たちは、この宣言や、それを概念化した「多元世界（pluriverse）」を著作のタイトルに取り入れ、このような先住民運動の性格に強い関心を示している［de la Cadena & Blaser et al. 2018; Blaser & de la Cadena 2018; Escobar 2018］。

だが「多元世界」の回復とは、いかなる事態なのか。もう一つの事例を見てみよう。エクアドルでは2008年、アンデス先住民の活発な働きかけを通じて、憲法で「自然あるいはパチャママ」として、それ自体に対して、存在や存続の権利が認められた。近代国民国家の政治に“異質”な権利主体が現れ、政治家や市民は動揺した［デ・ラ・カデナ　2017］。

こうした先住民の政治は、政治の場において主体になり得ず、人間の活動の客体である「自然」を前提にすると理解できない。この政治における「自然」でありかつ母なる存在者である「パチャママ」は、アンデス世界の別の前提がなければ、理解できないのである。人びとは、西洋近代の「自然」とは異なる存在者のいる世界が等価に扱われる、別の政治を目指しているのではないか。

以上の諸例が示すように、先住民と、近代国民国家、法、企業、産業、科学技術との間に、コンフリクトがある。このようなテーマは、従来ポリティカル・エコノミーやポリティカル・エコロジーが、「環境」の利用方法や「資源」の生む利益配分をめぐる政治として、あるいは先住民がそれらに対して特別な意味や価値観を与えているためにおこる文化的な政治として、捉えてきた問題である。例えば岸上（2007）は、北西アラスカの先住民の捕鯨をテーマに、「クジラ資源はだれのものか」と問い、ポリティカル・エコロジーからアプローチしている。

しかし、今や先住民の抵抗の性格は「多元世界」の政治である。それは、人びと、かれらの周囲のモノ、それらの相互作用からなる「世界」そのものと、近代国民国家や資本主義や科学技術の「世界」との差異の政治なのである。この政治の問題は、デ・ラ・カデナを引けば「環境」である「だけではない（not only）」［de la Cadena 2015］。

ＰＯは、ポリティカル・エコノミーやポリティカル・エコロジーが多文化主義の図式を前提にし、先住民の「多元世界」の政治を議論以前に度外視してしまう限界を批判する［Blaser 2009a; Blaser & de la Cadena 2018:5］。そしてＰＯは、先住民運動の新たな性格を捉える手がかりを、「はじめに」で確認した「存在論的転回」の人類学のモル（1999; 2016）とヴィヴェイロス・デ・カストロ（2018）の議論から得ることで［Blaser 2009a: 11］、限界を克服しようとする。以下でそれらを概略し、ＰＯの概念の骨子を見てみよう。

ＡＮＴのアプローチによれば、「自然」は様ざまなアクターの実践の相互作用を通じて立ち現れ、不安定さや複数性をもっている。そこからさらにモル（2016）は、異なる実践からなる複数の「自然」が、今度はいかにして互いに関連づけられたり、または切り離されたりするのかを、動脈硬化をめぐる病院の現場から明らかにした。

モルは、動脈硬化が、診察室の患者の歩行、痛みの感覚、医師による肌や温度の確認、あるいは病理部での血管の確認といった、別々の場所で様ざまな技術やモノとの関係性を作る諸実践を通じて存在すると分析する。様々な相互作用の中で、一方で動脈硬化は「在り」、他方では「不明」であり得る［浜田

2018: 26]。

それだけではなく動脈硬化の複数性は、ある時には相互の矛盾が顕在化しないように病院内の別の場所に分けられていたり、また別の時には互いが同時に成立するような関連付けがなされたりする。すなわち、複数の動脈硬化は「一より多いが多より少ない」仕方で重なり合っており、モルはこの多重性に注目した［ibid.: 26-27］。

ＰＯは、この多重性を多自然主義の発想と組み合わせて、コンフリクトの分析に応用する。そうしてPOはコンフリクトにおける「自然」が、役人や科学者や先住民のリーダーとの諸実践を通じて「一より多いが多より少ない」ような多重性を持つ可能性に、着目するのである。

では、「自然」の多重性は、いかにしてコンフリクトに発展してしまうのだろうか。ＰＯにとって、そのプロセスを捉える概念枠組みは、ヴィヴェイロス・デ・カストロが多自然主義の人類学の構想を発展させる中で提案した「多義性＝取り違え（equivocation）」という概念である［ヴィヴェイロス・デ・カストロ　2018］。

引用の神話を見てみると、「マニオク酒」という同じ言葉を用いて、人とジャガーが話している。お互いは、自分の「世界」の「マニオク酒」に言及しながら対話していたのだが、やがて全く違うモノについて語っていたという誤解に直面する。ヴィヴェイロス・デ・カストロは、このような先住民の思考を発展させ、異なる「世界」間で対話する両者は、同じ概念や語を用いながらも、モノの「多義性」ゆえにお互いが何について語っているのかを「取り違え」続ける、と概念化する。

POは、多自然主義の人類学に則って、コンフリクトの中の先住民が生きる、役人や科学者や企業家とは異なった「世界」を文字通りに想定する。そしてPOは、「世界」の間で、「血／マニオク酒」のような「多義性＝取り違え」が起こることで、コンフリクトに発展していると捉えるのである。

以上見てきた二つのコンテクストから、ＰＯは次のような前提を持つ。天然資源開発や環境保全を背景とした先住民の政治は、国家・企業・科学者・環境主義者・人類学者の世界と、先住民の世界の間の「多元世界」の政治である。そのような存在論的な政治の場は、「何が問題であるのか（what is at stake）」、その多重性や誤解を前提にしなくては理解できない。議論を先取りすると、この前提で考察する中でＰＯは、われわれにとっての「環境」と異なる実在をめぐる政治を先住民が実践していること、そして近代国家や科学的知識が自らの存在論を先住民の存在論と巧妙に関連付けたり切り離したりするプロセスを、民族誌から明らかにする。

３．多元世界の政治の民族誌

本章ではブレーザーとデ・ラ・カデナの民族誌的考察を紐解き、POの分析のポイントを整理する。

ＰＯにとって、「多元世界」を考察するには民族誌が鍵となる。二人によれば、民族誌とは様ざまな理論と人類学者自身の経験が混ざり合い織りなす概念づくりの営みである。そして中心的な過程となるフィールドワークとは、人類学者と現地の人びとの、二つの世界を作る異なる実践の遭遇である。民族誌の過

程もまた、それ自体が異なる存在論の間の緊張関係が浮かび上がる場、すなわち「多元世界」の政治が生成する場なのである［Blaser & de la Cadena 2018: 4-5］。

3.1 二つの「サステナビリティ」

ブレーザー（2009a）は、1999年からパラグアイ河流域でイシロ人の結社、国立公園管理局、EUの援助機関が合同で取り組んだ「サステナブルな狩猟プログラム」のコンフリクトに注目した。1995年から政府によって敷かれていた禁猟が解かれると、国立公園管理局の監督下でイシロの人びとは狩猟を許された。獲物になる動物をサステナブルに利用するために、人びとは先住民参加型のサステナビリティを掲げるEUの援助機関と協力し合おうとした。

しかし、プログラム開始2ヶ月で、援助機関や管理官はハンターたちが合意した規制を破り、さらには私有地やブラジル領内に侵入し略奪まで行っていると、クレームを出した[10]。ブレーザーはイシロの世界（イルモ）と国家や科学の世界（環境）との間で全く違うように実践され、そして互いが誤解している「サステナビリティ」にアプローチする。ブレーザーの分析のポイントを、以下で詳細にみていこう。

ブレーザーは、このコンフリクトに発展するまでの、パラグアイ河のイシロ人の世界が西洋近代の世界と絡み合ってきた歴史的なプロセスを、考察している。「サステナビリティ」がパラグアイ河において実践されるとき、すでにそこにはパラグアイ河への入植、材木伐採、大土地所有、イシロの商業ハンティングへの参加、パトロンの支配、宣教師による布教、領土回復、在来の実践の復活といった様ざまな実践を通じて生成した、人間と非人間の絡まり合いが畳み込まれているのである［Blaser 2009a:11, 14］。

「プログラム」が開始される以前、イシロは商業ハンティングを通じて入植者パトロンとパラグアイ河流域の経済に取り込まれ、依存関係を強めていた。1980年代になると、無秩序なハンティングはいくつかの種の絶滅の危機につながりかねないと、明らかとなった。そこで国家は規制を加えたものの、開拓時代を経て根無し草化していたイシロは違法に商業ハンティングに従事し続けた。

だがこの時期から並行して、彼らは自身の領土を獲得し始め、漁業資源向けの市場を新たに開拓するという自立のプロセスを歩み出し、次第に商業ハンティングに依存しなくなっていく。このような転換期、領土を得たイシロの中には「伝統主義者」として、人間を超えた力「ウクルブデイオ（ukurb’deio）」との交流実践を再開する者が現れた。こうしたコンテクストの中で、持続的に「動物」の頭数を管理しながらハンティングを維持する「プログラム」が入ってくる［ibid.: 12］。

次にブレーザーは、世界や人間以外の存在者についての諸概念を、人びとがどのように遂行しているのかに着目する。イシロの概念で「イルモ（yrmo）」は領土や世界や宇宙に相当する。古老によれば、イルモは互酬性の原理があらゆる存在を関係付けている宇宙である。「伝統主義者」を自認する者たちによれば、イルモには「アボ（abo）」という個々の存在が住んでおり、獲物はアボである。そしてそれぞれのアボを代表するウクルブデイオ、いわゆる守護精霊的な存在である「バゥルト（bahlut）」がいる。人間はこのバゥルトと互酬的な関係性を維持しなくてはならないとされている。

両者を、「コンサホ（konsaho）」と呼ばれるシャーマンが媒介している。バゥルトはコンサホに対する

贈り物として、獲物を狩人に近づける力や病気を治療する力を与える。これに対してコンサホは、さらに多くの人間をこの互酬ネットワークの中に加盟させ、儀礼的返礼をなす。

互酬的関係が破綻すると、様ざまな災いが起きる。中でも「プログラム」のコンフリクトの理解に重要なのは、バゥルトによって人間はアボに接近できなくなるという事態である。その理由は、人間同士の互酬ネットワークに問題があるからだという。リーダーたちを筆頭として、いかに「サステナブル」なハンティングを続けるかについて話し合いが開かれた際には、パトロンが自らの利益ばかりを考え富が分配されなかった時代にアボが減ったと口にされていた［ibid.:13］。

ブレーザーは、以上に見たようにイシロの人びと、国家、パトロン、市場経済、獲物、土地の権利、ウクルブデイオ、イルモ、アボといった、人間と人間以外の存在の絡まり合いが、いかに先住民の世界と近代の世界を作り出しているのか対称的に明らかにしている。

しかし、第三の要点は、いかに西洋近代の世界と先住民の世界に力の偏りがあるのかに注目する点である。いかに西洋近代の実践にのみ現実を規定する特権が配分されているのかを、考察するのである。

イシロにとって、平等にアボが分配されている時、イルモはサステナブルである。そこでイシロの結社は、当局に対して、彼らのハンティング産業に対する排他的な特権を求める。パトロンの時代とは異なる、富の公正な分配がアボの数を維持するだろう［ibid.: 13-4］。

しかし役人や専門家は、人格もエージェンシーもない生物学的な事実である「動物」と関わっていたため、イシロにとってのアボとの関係性を理解できなかった。理解できなかっただけではなく、彼らにとっては「イシロは環境に関して何であれ信じて構わないが、それらの信条による行動は、生物学者の環境についての知と齟齬があるべきではない」［ibid.: 14］。彼らは、一方でイシロのたどり着いた異質な論理によるコンセンサスを「文化」の領域へと押しやって「尊重すべきもの」とし、他方で「環境」を正しく代弁する力を自分たちにのみ認めるのである。

しかし、このように「環境」を作る彼らの実践は、大土地所有、それに親和的な政府、EUの文化＝生物多様性の達成目標といった、人間と非人間の特定の歴史的な政治経済的連合の中で作られた事実を隠蔽してしまう。

3.2 アンデスのコスモポリティクス

次にデ・ラ・カデナ（2017）の検討に移ろう。彼女の提案を一言で表せば、「人間以外のアクターが政治の場へ登場したことを真剣に（おそらくは文字通りに）受け止めること」である［48］。この簡潔な提案を、ここでは二つのパートに分けて検討して整理したい。

第一には、政治の場の考察である。上で見たブレーザーは、諸実践から立ち現れる二つの存在論の根本的な差異や誤解や力関係を明らかにした。それに加えてデ・ラ・カデナは、ストラザーンの「部分的つながり」を借りながら、差異と不可分な接続を明らかにする。

第二に、「人間以外の存在者（other-than-humans）」をいかに真剣に受け止めるのか、というものである。端的に言えば、彼女自身は、人間以外の存在者について知ることはない。しかし彼女は、そうした不可知

性に対して、自身とケチュアの人びととの間の「会話」を通じてアプローチしようと試みる。

2006年にクスコの広場でデモを起こしていた1000人を超える農民は、「アウサンガテ（Ausangate）」という名の「山」の麓の村むらから集まっていた。鉱山の利権獲得が、「アウサンガテ」そして「コイヨリッティ」という信仰実践の聖地でもある「シナカラ」に及ぼうとしており、人びとは抗議している。デ・ラ・カデナは親しい友人ナサリオ・トゥルポとともにその場に参加していた。ナサリオは地域の政治的リーダーであり、なおかつシャーマン「パンパミサヨク」であった［bid.: 48-49, 50］。

デ・ラ・カデナはそこで、ケチュア語の「ティラクナ（tirakuna）」という概念に注目し、この概念を英訳して「地のものたち（earth beings）」と表す。人びとが呼ぶ「アウサンガテ」は、彼らにとって「地のものたち」の一人であり、それはわれわれにとっての「山」とは全く違った存在である。鉱山開発の問題は、「山」だけではないのである。

デモの最中、デ・ラ・カデナはナサリオの「見解」に着目する。彼の危惧するところによれば、「アウサンガテ」は自分が統括する地域の山やまにおける鉱山開発を許さず、その怒りから人を殺す可能性がある。デ・ラ・カデナにとってこの「見解」は信じがたいが、しかしそれが、彼のデモに参加した政治的動機である。そして「アウサンガテ」は反応するという政治の前提を、彼だけではなく人びと、あるいは市長さえもが、共有していた［ibid.: 51］。

では、「アウサンガテ」は、いかに政治のアリーナに登場するようになったのか、異なる存在論が絡まり合う歴史的プロセスを見てみよう。16世紀、宣教師たちの課題は、ケチュアの人びと「ルナクナ」と「地のものたち」の結びつきの分離だった。宣教師たちは、アンデス世界でキリスト教的「人間」を構築するために、地のものたちを自然の領域に追いやる必要があった［de la Cadena 2019］。また1970年代の軍事政権下の大規模な農地改革では、ルナクナたちは「農民」として国家経済に統合されるべき存在であり、地のものたちは「土地」であるべきだった。［de la Cadena 2015］。

このように、16世紀からアンデス世界では在来の存在論と西洋の存在論の緊張が展開し続けてきた。今日、政治は人間同士の領域に、「環境」「資源」は自然の領域に配置されているが、ケチュアの「ルナクナ」と「地のものたち」の関係性が現実とは認められないそのような「世界」は歴史的産物なのである。しかし、デモから明らかなように、「アウサンガテ」はアンデス世界において「地のもの」であり続けてきた。

ここで「問題は、政治がその枠内に受け入れるのは人間のみである、以上。ということである」［ibid.: 70］。「通常の政治（politics as usual）」にとっては、人びとと「地のものたち」の繋がる世界は考慮に入らない「過剰（excess）」で、政治の領域・世俗の領域から排除される。デ・ラ・カデナはここに「政治の植民地的な性質と、それがヘゲモニーを持つに至る複雑な機構」を見出す［ibid.］。

このようにクスコのデモは一方で鉱山が立ち現れる世界と他方で怒るアウサンガテが立ち現れる世界の間の存在論的政治として浮かび上がってくる。さらにその政治の場は、西洋の存在論に特権性がある。かと言って、以下で見ていくように、アンデスの世界はペルーの近代国家の世界から完全に分離され、消滅させられたわけではない。

「通常の政治」から「地のものたち」は「過剰」として排除されてきたのにもかかわらず、今日の先住

民の権利や地球環境問題にまつわる複雑な政治状況下で、それらはますます顕在化している。言い換えれば政治の場には、よりいっそう複雑に絡まり合った山／アウサンガテという多様な実在が現れている。むしろ今、われわれは異なる存在論の間の接続という事態に目を向けざる得ないのである。ではこのような接続の一端を、どこに見いだせるのか。

歴史的プロセスにも見て取れるように、“インディオ”性と近代性は、互いが入れ子構造になって生成してきた。ペルーの国民国家とアンデス世界は「先住民 = メスティーソ」なのである［ibid.:59-60; de la Cadena 2000］。知事でケチュア語とスペイン語のバイリンガルで大学位保持する人物や、地のものたちと交流する読み書きの知らないケチュア語のモノリンガルといった人びとは、ケチュアの在来の世界にもペルーの国民国家の世界にも両方に身を置いている［ibid.: 60］。

こうして歴史的に生成した「部分的つながり」そのものである「先住民 = メスティーソ」が、一方ではエスニシティ、アイデンティティ、文化、階級、環境、領土、権利といった「通常の政治」の枠内に参与しながらも、他方では「地のものたち」という「過剰」を政治の舞台へと引き入れる回路を作っている［ibid.：61-62］。デ・ラ・カデナは、山／アウサンガテが「私たちの部分的につながった世界に入り込んでおり、そのため一より多く二よりは少ない存在者」であると理解する。「汚染と文化に関心を寄せる世界があり、アウサンガテがどう反応するかを心配している世界があり、さらに両者は識別できるが不可分なものでもあった」［ibid.: 63］のである。

このような分析は、自然と文化を分けようとすればするほどハイブリッドを生み出してきた「虚構の近代」［ラトゥール 2008］に強く影響されている。しかし、ここにはそれをラテンアメリカの現場から議論するオリジナリティを持ったPOの態度がよく示されている。

われわれは、今日の先住民の政治の差異と「部分的つながり」を捉えるために、「通常の政治」ではなく「多元世界」の政治を想定しなくてはならない。その政治の枠組みは、「私たちが自然と呼んでいるものの多重性についての相反する見解を討議のフォーラムに持ち込む」［ibid.7: 72-73］ことを可能にする。デ・ラ・カデナはそれを「コスモポリティクス（cosmopolitics)」と呼ぶ。

「コスモポリティクス」とは、哲学者I・ステンゲルスの提案した概念で、人間だけが特権的に構成する「政治」ではなく、「地のもの」や、動植物や精霊など、人間以外のアクターをも含み込んだ諸世界からなる広義の「政治」の概念である［里見2018］。POは、先住民の世界と西洋近代の世界の間の「コスモポリティクス」への民族誌的な視点なのである。

ここで「民族誌的」という点に注意したい。ここまで本稿は分析方法を整理するため、人類学者を、先住民の世界と西洋近代の世界との間のコンフリクトを俯瞰して見ている存在のように描かざるを得なかった。しかしPOの考察は、俯瞰的な視点でどのような世界が歴史や政治や経済の中で立ち現れるのか分析する一方、他方ではエスノグラファー自身と現地の人びとの間のミクロな経験を微細に分析する特徴を持つ。そのような往還的な視点から、POは「コスモポリティクス」を記述し考察するのである。前述のようにブレーザーやデ・ラ・カデナが民族誌を経験と理論の混ざった営みと考えていたことを想起できるだろう。こうした特徴がより色濃く出ているのが、デ・ラ・カデナの著作である。

以下では、POのもう一つの分析ツールである「会話」を整理したい。「コスモポリティクス」は、デ・ラ・カデナ自身とナサリオの間柄でも常に生成している。

3.3「わたしたち」の会話

デ・ラ・カデナは次のように「会話」について述べている。「会話というものは、わたしたちのものであって、純化された“彼ら（あるいは彼）”や“われわれ（あるいはわたし）”は出てこない」［de la Cadena 2015:xxvii］。以下では、整理のため「わたしたち」と「われわれ」を区別して用いたい。前者は、デ・ラ・カデナとナサリオの間柄を指すのに対し、後者は人類学において馴染みの「彼ら」に対する「われわれ」とする。

引用に見て取れるように、「会話」の中で生まれる「わたしたち」は多重性をもっており、それは同時に、異なる「世界」の多重性の生成でもある（フィールドワークとは何かを想起されたい）。

デ・ラ・カデナの捉え方では、「会話」は「翻訳」と「部分的つながり」の要素からなる［ibid.:4］。ここで「翻訳」とは、第2章で確認した「多義性＝取り違え（equivocation）」である［ヴィヴェイロス・デ・カストロ　2018; ibid.: 27,212］。「会話」で、「わたしたち」は、同じ語・概念で話しているが、このコミュニケーションは複数の世界をまたいでいるので、互いは別々のモノについて同じモノかのように話していると誤解を起こしている。

では、彼女がこのような「会話」に気がついた一部始終を具体的に見てみよう。2005年、ナサリオは彼女にこのように口にしたという。「君は、（コカの葉の上に）息を吹きかける。かれら（地のものたち）の名を呼びながら。僕らがアウサンガテと言うのは空虚なことではない。彼らはそういった名前である」［ibid.:24、補足は被引用者］。

二人は、「アウサンガテ」について何度も話し合ったと思われる。デ・ラ・カデナはルナクナの話すケチュア語を操り、また豊富な民族学的知識を備えており、「アウサンガテ」を知識によって把握できる。言い換えれば、自らの認識論的枠組みの中で明快な言葉によって「アウサンガテ」を説明できる。

それに対してナサリオは「アウサンガテ」を、何かモノ自体に付与された意味として扱っているのではなく、それ自体として実在するように扱っている。この時、二人の間に大きな隔たりが生まれる。彼女が自らの認識論の領野内へ「翻訳」をすればするほど、ナサリオにとっての「アウサンガテ」を知ることからは遠ざかっていく［ibid.: 26-7］。

> 私が、名付けるものと名付けられるものの間のこの単一性（oneness）に気づいたのは、他ならぬわたしたちの会話の間だった。その時、私はナサリオにプカラは何か、と尋ねた。ナサリオは、その言葉が、私の慣れ親しんで用いているそれとは異なった発話の体制に属していることを示唆し、こう答えた。そう言われても、説明するのは難しいよ。君は理解しないだろうし、君の紙の上に君が何て書いたところで、それは何か別の他のものを言わんとしている。…プカラは、単にプカラだ。それは、違う話し方だ。プカラは、一人の違いのある人間ではないし、違いのある土でもないし、違いのある岩でもないし、違いのある水でもない。それは同じもの――プカラ。それについて話すのは難しいね。

マリソルはプカラがどこに暮らし、その名前は何で——彼女は、それは人間、奈落、岩、水、湖と言うだろうけど——というのを知りたいんだろう。プカラは異なる言い方だ。それは理解するのは難しいよ。簡単ではない。プカラはプカラだ！［ibid.: 29-30］。

「会話」の「多義性＝取り違え」ゆえに、相手もまた自分に対して翻訳と説明を試み、しかしそれがうまくできず、差異がより大きくなっていく。こうした場面を、POは分析する。差異を大きくする「多義性＝取り違え」を前提にしなければ、「われわれ」は「彼ら」を沈黙させてしまう［ヴィヴェイロス・デ・カストロ　2018］。

ナサリオをはじめルナクナの人びとは、彼女のような「非クスコ人の近代的個人」にとって「地のものたち」は山の名前であるとわかっている［de la Cadena 2015:25］。ナサリオのように、ルナクナもまた「非クスコ人の近代的個人」たちと自分たちの間を比較し、その埋めがたい溝を知りつつ、自分たちの「地のものたち」が相手にとって何であるかを伝えようと試みている。しかし「地のものたち」は「地のものたち」自体なのである。「わたしたち」はここで「プカラ」と言う同一の語で確かに「会話」している。そしてこのコミュニケーションの中で、二人は、説明や理解を試みるほど、大きくなって立ち現れていく埋めがたい溝に直面していると言える。

このように「会話」は、双方向的に差異と接続が同時に、そして具体的に現れる場である。だからデ・ラ・カデナは、「多義性＝取り違え」は、二人が「身を置いている（inhabit)」「関係的な場所」であると表現する［ibid.: 27］。

まとめよう。デ・ラ・カデナは、「わたしたち」の会話が「多義性＝取り違え」と「部分的つながり」からなると理解する。この経験と理論を編み込んだ営みを、POは分析する。分析する場面は、「わたしたち」が同じ語でもって、「われわれ」が自然と呼ぶものについて話し合っているかのような時である。フィールドワークを通じて人類学者は、様々な言葉を用いてその語を説明できるようになっていくだろうが、そのとき、むしろ最も相手の世界から遠ざかった「多義性＝取り違え」の中にいる。この差異ある接続にＰＯは積極的に目を向ける。

ＰＯは、差異こそが「会話」をより活発にすると捉え、相手自身もまた身をおく「多義性＝取り違え」に注目する。時に相手はかなり苛立ち、自分もそれらの「過剰さ」にうろたえるかもしれない。しかし、そのようなちぐはぐさをあえて提示し、POは自らの認識論的領域において雄弁に説明しヘゲモニーを隠すことから、できる限り逃れようと試みる。それを通じて、民族誌は、差異と接続が相互構成的である「わたしたち」の世界（our worlds）の可能性に、開かれる。

3.4 もう一つのコスモポリティクス

*Cultural Anthropology*誌上で、デ・ラ・カデナ（2017［2010］）の「アンデス先住民のコスモポリティクス」に呼応するように、ブレーザー（2016）は「もう一つのコスモポリティクスは可能か？」と題した論考を寄せている。「もう一つのコスモポリティクス」とは、ステンゲルスの「コスモポリティクス」とは違うものを意味する。デ・ラ・カデナ論文の検討でも見たように、「コスモポリティクス」は異なる存在論

の間で共有されるものを可能な結果として考えられる。例えば、鉱山資源とアウサンガテの差異から出発し、結果的に「部分的つながり」を見つけられた。これは、共有された「自然」から出発する「通常の政治」とは前後関係が逆になる。これまでに見た「コスモポリティクス」は、排除された「過剰」を考慮に入れながら、共有されたものの世界を思考するのである。

だが、ブレーザーは、それが共有されたものの世界を想定し、否定したはずの普遍の基盤を（紆余曲折はあれど）認める点を批判する［Blaser 2016: 548］。この限界によって、ブレーザーは「コスモポリティクス」が備えているはずの理論的な魅力が減じていると考え、「もう一つのコスモポリティクス」を民族誌から提示できると主張する。つまり、共有されていないものの世界の可能性である。

具体的に見ていこう。ニューファンドランドとラブラドールの行政は2013年1月、カリブーのサステナビリティのための向こう5年間の禁猟を告示した。1990年から2012年までに起こった著しい個体数減少の原因は定かではなかったものの、カリブー猟はサステナブルでないと考えられた。イヌーやイヌイットにとってこの禁猟はかれらの生の根源的な問題で、リーダーや古老たちはハンティングを続けるべきだと主張した［ibid.: 545］。ブレーザーは2009年から、イヌーの非営利団体に関わり、ハンターや古老と知り合うようになったという。

ハンターたちにとっては「アティク（atîk）」の守護者である「カニピニカシクエウ（Kanipinikassikueu）」と人々との関係性が問題であった［ibid.］。重要なのはカニピニカシクエウとの友好な関係性の回復であったのである。ハンティングをやめれば、アティクはむしろいなくなってしまう。このような意味でのアティクとの関係性の回復に、イヌーの非営利団体は取り組んでいたのである。ここでも問題は、政府や野生動物管理官の実践で立ち現れるカリブーと、ハンターたちの交流で立ち現れるアティクは異なる、という点にある。しかしながら「アティク／カリブー」には、アウサンガテのような多重性もある［ibid.: 557］。

一方ではカリブーである世界と、他方ではアティクである世界が差異と接続を持った「コスモポリティクス」としてこの事態を考察できるだろう。しかしブレーザーによれば、この事例は、共有されたものの世界に基づかない「コスモポリティクス」、すなわち「もう一つのコスモポリティクス」の可能性を持っている。

イヌーの非営利団体は、かれらのアティクとの交流法を政策へと翻訳しようと試みる。かれらは野生動物管理官との対話の中で、アティクのハンティングには時間も労力もかかるために、ハンターと古老のやり方に従えばカリブーの捕獲数は減るだろうと説明した。反対を押し切って禁猟を敷くのはイヌーの承諾を得られないし、また人びとのハンティングをストップさせるほどの管理も行き渡らないなどと追及した。野生動物管理官の理解できる論理や文法で説明し、だからイヌーの古老たちのやり方とのコラボレーションの方が効果的だと主張したのである。

野生動物管理官は、前向きに検討する態度を見せた。しかしながら、結果2013年には禁猟が敷かれる。すると当初からイヌーたちが指摘していたように、人々はハンティングを続行した。だが、野生動物管理官はその事態をヘリコプターから監視するにとどめ、狩猟に関係した逮捕者は出なかった［ibid.: 565］。

ブレーザーはこの一見丸く収まっていない事態を、「もう一つのコスモポリティクス」の鍵とする。す

なわち彼の指摘によれば、ここでは当事者自身が「多義性＝取り違え」を制御された仕方で実践している。イヌーたちが行政のために翻訳した内容を見てみると、かれらは行政のわかるような仕方に問題を置き換えており、アティクとの在来の交流とは全く異なる話をしている。その一方、人びともまた、在来の実践を続行している。すなわちここでは、イヌーの人びとも野生動物管理官も、アティク／カリブーに対する交流の仕方を維持し、かつ一方が他方を従属的な地位に引き下げることを避けたのである。ここでは何か共有されたものに基づいた合意は特になく、双方が理解し合わないままに、アティク／カリブーが立ち現れている。このように民族誌が「共有していないこと（the uncommon）」に基づく「もう一つのコスモポリティクス」の可能性を示している。

4．まとめ

本稿はPOの分析方法を検討し、整理した。

2章では、POのコンテクストを整理した。POの着想は、ラテンアメリカをフィールドに、「存在論的転回」と先住民の諸実践の交差点にあった。そこから生まれる問いは、われわれは「多元世界」にあると前提すべきではないか、というものだった。ANTと多自然主義の発想は、人間とモノの相互作用から生成する「自然」と、その多重性を思考することを可能にした。その一方、今日の先住民の政治は「多くの世界がおさまる一つの世界」の回復を目指していた。POはそこで、例えば環境／人間以外の存在者である、多重性をもった「自然」を前提に、「多元世界」の政治へと思考を開いた。

第3章では、ブレーザーとデ・ラ・カデナの著作を検討し、具体的にPOの分析方法を検討した。それは次のようにまとめられる。(1) 天然資源開発や環境保全と先住民の政治の複雑な結びつきを背景に、従来は先住民の世界観と科学的事実や行政との間で「環境」をめぐるコンフリクトがあると捉えられてきたフィールドを、POは捉えなおす。(2) そうしたフィールドに対して、「何が争点であるか」について合意がないという前提でアプローチする。(3) フィールドで人類学者はその「何」を在来の存在論と西洋近代の存在論にまたがる多重な「自然」、例えば「アウサンガテ／山」として捉え、記述する。(4)「世界」同士のコンフリクトを理解するためには、人間と非人間／人間以外の存在者をめぐる諸実践の歴史的プロセス、そのプロセスの中で遂行される在来の概念、そして「通常の政治」と「過剰」のコンフリクトを明らかにする必要がある。(5) 並行して、「わたしたちの会話」に目を向ける。「わたしたち」は、「多義性＝取り違え」の中で「過剰」の多いちぐはぐなコミュニケーションをしている。それをPOはむしろ積極的に記述し提示する。(6) こうした考察を通じて、POが民族誌から示す「もう一つのコスモポリティクス」は、「われわれ」が「自然」と扱ってきたものの多重性や可能性についての想像力を喚起し、「共有されていないものの世界」への思考を開くのである。

本稿は、POというアプローチについてブレーザーとデ・ラ・カデナの著作を紐解いて検討した。いかに批判的にこの方法論を精錬すべきかについては、本稿は立ち入らなかった。これまで整理した方法の限界は、やはり民族誌を通じて指摘され、克服されていくべきであろう。ブレーザーもデ・ラ・カデナも、

民族誌を通じてPOのアプローチを切り開いた。それに続くわれわれは、彼・彼女の前提を一度は引き受けつつも、自身の経験と理論の結びつきが生む新たな「仮想」に対して、常にオープンでなくてはならない。

参照文献

英語

Blaser, Mario

[1] 2009a　The Threat of the Yrmo: The Political Ontology of a Sustainable Hunting Program. *American Anthropologist* 111(1):10-20.

[2] 2009b　Political Ontology: Cultural Studies without 'cultures'? *Cultural Studies* 23(5-6): 873-896.

[3] 2016　Is Another Cosmopolitics Possible? Cultural Anthropology 31(4):545-570.

Blaser, Mario & Marisol de la Cadena

[4] 2018　Pluriverse: Proposals for a World of Many Worlds. In Marisol de la Cadena & Mario Blaser (eds.) *A World of Many Worlds*, pp.1-22. Durham and London: Duke University Press.

de la Cadena, Marisol

[5] 2010　Indigenous Cosmopolotics in the Andes: Conceptual Reflections beyond "Politics". *Cultural Anthropology* 25(2):334-370.

[6] 2015　*Earth Beings: Ecologies of Practice across Andean Worlds*. Durham and London: Duke University Press.

[7] 2019　Earth-beings: Andean Indigenous religion, but *not only*. In Keichi Omura, Grant Jun Otsuki, Shiho Satsuka, and Atsuro Morita (eds.) *The World Multiple: the Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, pp.21-36. London & New York: Routledge.

de la Cadena, Marisol & Mario Blaser eds.

[8] 2018　*A World of Many Worlds*. Durham and London: Duke University Press.

Escobar, Arturo

[9] 2018　*Designs for the Pluriverse: Radical Interdependence, Autonomy, and the Making of Worlds*. Durham and London: Duke University Press.

Mol, Annemarie

[10] 1999 Ontological Politics: A Word and Some Questions. In John Law & John Hassard (eds.) *Actor Network Theory and After*, pp.74-89. Boston, MA: Blackwell.

Viveiros de Castro, Eduardo

[11] 1998　Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of Royal Anthropological Institute* 4(3): 469-488.

日本語

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド

[12] 2015 『食人の形而上学――ポスト構造主義人類学への道』檜垣立哉＆山崎吾郎（訳）洛北出版。

[13] 2018 「パースペクティヴの人類学と制御された取り違えという方法」近藤宏（訳）『現代思想』46(1):197-212。

春日直樹（編）

[14] 2011 『現実批判の人類学――新世代のエスノグラフィへ』世界思想社。

岸上信啓

[15] 2007 「クジラ資源はだれのものか——アラスカ北西部における先住民捕鯨をめぐるポリティカル・エコノミー」秋道智彌（編）『資源とコモンズ（資源人類学第８巻）』pp.115-136、弘文堂。

[16] 2018 『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』ミネルヴァ書房。

桑山敬己＆綾部真雄（編）

[17] 2018 『詳論文化人類学——基本と最新のトピックを深く学ぶ』ミネルヴァ書房。

小池洋一＆田村梨花（編）

[18] 2017 『抵抗と創造の森アマゾン——持続的な開発と民衆の運動』現代企画室。

里見龍樹

[19] 2018 「「歴史」と「自然」の間で——現代の人類学理論への一軌跡」前川啓治＆箭内匡（編）『21 世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』新曜社。

デ・ラ・カデナ、マリソール

[20] 2017 「アンデス先住民のコスモポリティクス:「政治」を超えるための概念的省察」田口陽子訳『現代思想』45(4):46-80。

浜田明範

[21] 2018 「存在論的転回とエスノグラフィー——具体的なものの喚起力について」『立命館生存学研究』1:21-31。

森田敦郎

[22] 2011 「モノと潜在性——タルド的視点に基づく機械の民族誌の試み——」『文化人類学』76(1):33-52。

モル、アネマリー

[23] 2016 『多としての身体：医療実践における存在論』浜田明範＆田口陽子訳、水声社。

ラトゥール、ブルーノ

[24] 1999 「科学が作られているとき——人類学的考察」川崎勝＆高田紀代志訳、産業図書。

[25] 2007 『科学論の実在——パンドラの希望』川崎勝訳、産業図書。

[26] 2008 『虚構の「近代」：科学人類学は警告する』川村久美子訳、新評論。

Is the "Environment" at Stake?
——The "Not Only" Perspective of Political Ontology

Hayato KANZAKI

Abstract:

This article provides an overview of the framework of political ontology (PO) as elaborated by Mario Blaser, Marisol de la Cadena, and Arturo Escobar. Recently, Japanese anthropologists have translated key works of the so-called "ontological turn" and thereby formed general understandings of this theoretical movement; however, such research has not included PO. This article reviews the works of the above-named authors and presents an overview of their main analytical points for the purpose of sharing ideas of PO in this language.

Inspired by the concepts of the actor-network theory and multinaturalism, both of which re-consider the nature-culture dichotomy, PO tends to focus on cases in which extractivist or environmentalist practices conflict with those of indigenous people. Whereas political economy and political ecology assume that what is at stake in such situations is the "environment," PO perceives these clashes to embody a conflict between different "worlds." In that regard, what we call the "environment" is not only an object of modern knowledge but also emerges as "persons" through indigenous concepts and practices. PO first analyzes historical contexts to consider how nation-states, the market economy, scientists, indigenous leaders, community members, and other entities interact with nonhumans. Second, it investigates the types of concepts that indigenous people refer to and perform. For example, what scientists call "an animal" can also be the spirit with whom people maintain reciprocity relations. The third point of PO is the hegemony of western ontology, which reduces complex systems of indigenous knowledge to quaint elements of "belief" or "culture" that are not treated seriously in modern politics.

The PO framework also examines what de la Cadena calls "our conversations" between the ethnographer and local interlocuters, which entail an encounter between two different worlds. Borrowing the notion of "equivocation" from Viveiros de Castro, PO shows how misunderstandings about what is at stake render such communications multivocal and opens up political heterogeneity based on the "uncommon world."

Key Words : Political ontology, Ontological turn, Indigenous people, Environment, Politics